
教えてあげる

月乃宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
教えてあげる

【Nコード】
N1306U

【作者名】
月乃宮

【あらすじ】
成績が悪いので家庭教師をつけられる事になってしまった高校生
の律子^{りつこ}。その家庭教師は遠縁で、幼馴染の香坂葉月^{こうまかはづき}。昔の面影は消
えてしまい、すっかりいじわる？になってしまった葉月に反発を覚
える律子だが……？ 家庭教師と女子高生の、爽やかほのぼの恋愛
ストーリーです

01： 教えて欲しい 前編

残暑もきびしく……というよりも夏バテ？、といった今日この頃。

自他共に認めるインドア派の私こと橋田律子はしたらつこが、なぜこんな日に外をうろついているかというのにはワケがある。

……逃げているのだ、アイツから。

少々歩きつかれた私は、クーラーの効いた駅ビル内の本屋で雑誌をぼんやりとながめてた。

【この夏、絶対に欲しいお洒落コスメ】

【モテ髪特集！ 今年の夏こそ生まれ変わる】

【夏バテ特集 やさしいヨガ入門】

ヨガね……思わず手に取ってページをめくってみる。

この『鳩のポーズ』かなりキツそう……。

「身体、硬いんじゃないかったのか」

ふいに隣から聞こえた声に、私は文字通り飛び上がった。

「……葉月はづきはさん」

目の前の男、香坂葉月かざまはづきは、不快モード全開で舌打ちをした。ブルグレーのシャツにベージュのストリングカーゴ姿は爽やかに見えなくもない。しかし細い鼻梁にかけられた銀縁眼鏡の奥からのぞく視線は冷ややかで、酷薄そうな薄い唇からはみじんもやさしさを感じ

じられない。

「今日は三時からの約束だったろう。お前まさか、分かっててこんな所で油売ってたのか？」

「そ、それは」

「ふざけるな。この忙しい俺が一体どれくらい待ったと思っているんだ。さ、帰るぞ」

葉月は私の遠縁で、さいきん私の家庭教師になったばかりだ。

そう、家庭教師だってさ！

マンツーマンな勉強なんて絶対ヤダと思ったけど、私には拒否権が無かった。だって、あの成績じゃあ無理もない……まだ高一とはいえ、このままじゃ浪人一直線だ。

それに下手に拒否すると今度は塾とかゼミとかに行けって言われそうだし、それならば『遠縁の方に頼んだら、週一で家庭教師してくれるんですって』という母の提案の方がマシだと思ったのだ。

そう、マシなはずだった……この葉月じゃなければ！

葉月は、T大の法学部に通う秀才くんである。

どうやら子供の頃から頭が良かったらしく、大学でもかなり有名なんだって。どう有名かなんて知りたくもないし興味もないけどさ。

だいたい葉月とは子供の頃に数えるほどしか会ってない。たしか

小学生のころ田舎のおばあちゃんちへ遊びに行ったときだったと思う。

記憶の中の葉月は小さくて痩せてて、ビン底眼鏡で、見るからにガリ勉君な顔色の冴えないヤツだった。それが今じゃ……月日の流れとは本当に恐ろしい。

今も昔も頭は良いというのは変わらないみたいだけど、背は170センチ近くある私より高くなっちゃって、あの病弱そうな面影は一切キレイにかき消えてしまった。

すっかり変貌をとげた葉月だけど、ヤツの中でも一番変わったのは性格だろう。

「それで模試の結果はきたのか」

「う……まあ」

「どうした、悪かったのか」

ずけずけと遠慮のない物言いが癪にさわる。凶星なぶん、いつそう腹が立つ。

母はなんだって、こんな嫌味な男に私の家庭教師を頼んだのだから……どうせなら短大とかに通っている優しいお姉さんが良かった。(だが残念ながら親戚にお姉さんはいない)

あ。
高二的の夏休みから、受験勉強に塗りつぶされるなんてヤダな

憂いのため息を漏らした私を、葉月はあわれみの眼で見つめた。

「心配するな、お前はまだ高二だ。今から準備すれば、どっかの短

大ぐらいは引つかかるだろう。」
「はあ……」

違う……心配しているのは模試の結果じゃなくて青春だ。私の高
二の夏休みが灰色に染まったことだ。

それに加えて、この家庭教師と上手くやっていけるかどうかが心
配だ。

昔の微かに残っている記憶によると、葉月はとても優しい「お兄
ちゃん」だったおぼえがある。

一緒に遊びに行く時は必ず私の手を引いてくれた事や、お菓子を
分けてくれた事。

葉月は私の事を「りっちゃん」と呼び、私は「お兄ちゃん」と呼
びながら、葉月の後について回ったこと。

ある日、蝉せみを取る為に木に登った私が、あやまって枝を踏み外し
て転落した事があった。

大事にはいたらなかったけど、私よりも葉月の方が先に泣き出し
てしまった。膝をすりむいて泣き出しそうだった私はぼうぜんとし
て葉月を見上げた。

なぜか葉月は「ごめんね」と何度も私にあやまって、すりむいて
血がにじんでいた私のひざにツバをつけてくれたっけ。

ある時は一緒に買った棒アイスを、私は半分まで食べて落として
しまった事があった。

泣きはしなかつたけれど、私はかなりショックで口もきけないままその場に立ちつくしていたら、葉月が自分の残りを私に差し出してくれた。

それがすぐくうれしくて、でも子供心に申し訳なくて、少しだけ泣きそうだった気持ちを良く憶えている。

……あの頃の私は確かに「お兄ちゃん」の事が大好きだったのに。

「数学18点か。まさかここまで酷いとは」

「うっ……」

自宅にもどって、まずはクーラーつけて涼もうとした矢先、葉月は『模試の結果を出せ』と要求してきた。クーラーをつける前に、すでに室温が一、二度下がったような気がする。

「基礎からやり直さないと駄目だな。リツ、中学の教科書はまだあるのか」

「もう無いけれど」

「じゃあ今週末にでも、一緒に本屋へ参考書を選びに行くぞ」

「……うん」

やる気の無さそうな私の声音に、葉月は眉をひそめて冷ややかな視線を寄せた。

「次は逃げだしたりしないように、小枝子さへこ叔母さんに頼んでおくからな」

「もうしません……」

「信用するには、まだ時間がかかるな」

葉月はそう言って少しだけ口角を上げると、笑いらしきものを微

かに浮かべた。

葉月の言い分はもつともなのに、なぜかいちいち私の癪かんに障る。どうしてここまで葉月に反抗心を覚えるのかよく分からない……誰かわかるものなら教えて欲しいくらいだ。

01： 教えて欲しい 後編

結局その日や今後の勉強計画を立て（というか葉月の独断で決定し）、さらに今週末に参考書選びに行くことを約束して終わった。待ち合わせ場所と時間を決めると葉月は早々に帰ってしまい、自室に残された私は、これから葉月と勉強する夏休みの日々を頭に思い描き、ひとり憂うつな気分になった。

もう今日は勉強やる気も起きそうにない（いつも起きないけど）冷房を効かせた自室のベッドで寝そべっていると、軽やかなノックの音がしたので枕から頭を上げた。

「りっちゃん、入ってもいい？」

「どーぞー」

私の声に、姉の栄子えいこがそろりとドアを開けた。

「どう、第一日目は？」

「サイアク」

「あらら、初日からしごかれたんだ」

姉はクスクスと笑ってベッドの端に腰を下ろした。

大柄な私とはちがい、小柄で可愛い姉は外見を裏切らない優しい性格をしている。ガツツな私と比べられる事もあるが、これでも姉妹上手くやっているのだ。

「葉月ちゃんと久しぶりに会ったね。大きくなってて、びっくりしちゃった」

「お姉ちゃん、なんだか著しく年寄り臭いセリフじゃない、それ」

姉は「ひどっ」と私の上に体重をかけてのしかかってきた。重っ……小柄だけど重いよ、お姉ちゃん。

「だって昔の葉月ちゃん、小さくって女の子みたいだったじゃない。りっちゃんと三つちがいだけど、あの頃は背だつてりっちゃんの方が高かったでしょ」

「私は昔から大柄だったからねー」

「いーじゃない、背が高くって私はうらやましいよ。葉月ちゃんも昔良く言ってたよ、りっちゃんみたいになりたいなあって」

その話は初耳だ。

だけど昔の葉月は本当に軟弱そうだったし、実際ひ弱な子だったみたいだから、『男の子より乱暴な暴れ馬』と言われた私をうらやましく思っても不思議じゃない。

「きっと今の葉月なら、私みたいにならなくてよかったーって思ってるんじゃないの。特に頭は似なくて正解だったね」

「もう、りっちゃんたら！」

「それにしても、あの頃の葉月は面倒見がよかったなあ」

「それは今もでしょ？ 葉月ちゃんは昔からりっちゃんばかり、かまっていたしね。そういえば昔みたいに『お兄ちゃん』って呼ばないの？」

「えー、今さら『お兄ちゃん』は無いでしょ」

「でも『葉月さん』なんてよそよそしい呼び方も無いでしょう」

だって、親しくないもん。

久しぶりに会ったのは姉も両親も同じなのに、皆そろってすぐ葉月と打ち解けていた。かたくなな態度は私だけ。

だって、あんなの『お兄ちゃん』じゃない。

私の知ってたお兄ちゃんは、ひ弱で、細くて、私より背が低くて、
蝉取りも下手で、足も遅くて……私の方が勝っていた。それなのに
……。

「変わったよなあ……葉月」

「カッコ良くなったね」

私はむっとして、あいかわらず寄りかかったままの姉を見上げた。

「私は昔よりも無愛想で嫌なヤツになった、って意味で言っている
んですけど？」

「えー、それは前よりも無口になっただけでしょう？ ほら、大人
になったわけだし。でも『嫌なヤツ』だなんて、葉月ちゃん聞いた
らきつと落ちこむと思うなあ」
「なにソレ」

姉はニコニコ笑って爆弾発言をかました。

「だって葉月ちゃん、昔からりっちゃん一筋だし？」

私は一瞬固まってしまったが、すぐに復活して身を起こした。

「……あのね、お姉ちゃん。さっきの葉月の態度を見たでしょ？
私のこと、どーしようもない馬鹿だと思っているんだよ？ ニコリ
ともしないし、無愛想で嫌味だけじゃない。そのどこが、私を
一筋だって？」

「照れてるのよ、きつと」

「だー！ お姉ちゃんは、ほんつと平和主義だわっ」

私は再びベッドにバタリと身体を倒した。

「あーあ、なんだってお母さんってば、よりによって葉月なんかに家庭教師頼んだのかなあ……」

「あれ、知らないの？」

姉が、含みのある笑みをもらす。

私が「何？」と首をひねると、姉の笑顔が深まった。

「だって葉月ちゃんの方から、りっちゃんの家庭教師をさせてくださいって言い出したんだよ？」

週末の日曜。私は約束通り、葉月との待ち合わせ場所へと向かっていた。

貴重な休日なのに、なんで午後一で参考書選びへ出向かなくてはならないの……まあ夏休みだから日曜も平日もないけど。

それにしても、葉月からの提案だったんだ……家庭教師っての。

昨日あれから姉に詳しくきいた話によると、このあいだ祖父の法事へ出向いた母が、香坂の叔母さんに私の成績について愚痴っていたらしい。

すると法事に居合わせた葉月がその話を聞いて『ちょうどバイトを探していたから』と、母に私の家庭教師をやらせて欲しいと頼んだそう。現役T大生からの申し出に、母はふたつ返事で快諾したんだと。

どうせカテキョのバイトするなら、もっと頭イイ子を選べばいいのにさ。

その考えは、私自身をへこませた。だってこれじゃ馬鹿な自分を認めてるだけじゃないの。

いや、たしかに私は馬鹿だ……つまらないことにこだわっている。

今の葉月は昔とちがいで、私との歴然とした差を感じる。『お兄ちゃん』ぶって私にくつついていた昔の葉月は、今や本当に頼りになるであろう年上のお兄さんとなった。

私は自分が小さく思えた……葉月の前だと。

実際、背も小さく思えるのが癪だ。私より低かったくせに。

あーあ、つまらない。

私はモヤモヤした気分で陸橋を渡っていたが、ふと足を止めた。ここからの眺めは、待ち合わせ場所に指定した某デパートの入り口がよく見渡せるのだ。

だから視力の良い私が、遠目でも葉月の姿を見つけるのは簡単だった。

葉月はデパートの入り口の前にある煉瓦色の壁に寄りかかり、ぼんやりと人の波を眺めているかのようだ。時おり、自分の腕時計に目を走らせる。

待ち合わせの時間まで、まだ20分も時間あるのに？

たまたま近くの店で買い物する用事があった私は、少し早めに家を出てきたのだ。

私は陸橋の手すりにもたれ、さらに葉月の様子を眺めた。

少し落ち着かない様子の葉月……一体いつからあそこで待っていたのだろう。

私はとりあえず目的の店へ寄り、その後待ち合わせ場所へと足を運ぶ……約束の時間まであと5分弱。

やがて私の姿を見つけた葉月は一瞬ほっとした表情を浮かべた。

「一応、時間通りだな」

「待った？」

「別に」

そっけなく言った葉月は、私の手にした紙袋に目をとめた。

「あ、コレ？ ケーキだよ。お姉ちゃんに頼まれたヤツ」

「ふーん……」

「買い物終わったら、葉月さんも一緒に家でお茶を飲みましょうってさ。どうする？」

「いいけど……ちょっと、それ貸せ」

私は素直にケーキの入った紙袋を差し出すと、葉月は中をチラリ

とのぞきこんだ。「オレンジケーキか」と一言つぶやくと、それを手に持ったまま歩き出した。

『葉月ちゃんってば、ああ見えてもね、むかしから甘いものには目が無いのよ』

姉の言葉を思い出す……ああ、たしかに嬉しそーな顔しちゃって、まあ！

私の視線に気がついた葉月がむっとした。それが子供っぽくて、なんだかすごく可笑しかった。

そのとき、思ったよりも悪い夏休みじゃないような気さえしたんだ。

02：話して欲しい 前編

夏も終わりに近づき、『まだ毎日そうめんってどうよ？』といった今日この頃。

地元で催される夏祭りを今夜に控え、私こと橋田律子はしだりつこは近所の幼馴染と携帯でおしゃべりしていた。

うちの近所の神社で開かれる夏祭りは毎年8月31日と決まっています、その日は普段滅多に顔を合わすことがない昔の同級生と会える同窓会のようなイベントとなっていた。

「七時半頃に、いつもの神社手前の本屋で待ち合わせようか」

「うん、ご飯食べてから出るでしょ？」

「ちよっとだけね。あとは屋台で色々食べるし」

小学校時代の同級生である加奈ちゃんは、中学から私立の学校へ入ってしまったので、ここ数年は年に一度の夏祭りでしか顔を合わさない。

夏祭りの日はいつも加奈ちゃんと、それから他にもう二人の同級生といっしょに本屋で待ち合わせてから神社へ向かうのが定番なのだ。

「りっちゃん、ご飯の支度手伝ってー」

階下から姉の栄子の呼ぶ声が聞こえてきた。

私は携帯を片手に尽きないおしゃべりをしながら下のリビングへ向かうと、姉と母が台所とテーブルを行ったりきたりと忙しそうに

していた。

「あれ、誰かお客さん来るの？」

一つ多めに用意された席に気がつき、姉にきいてみると。

「ああ、それ葉月ちゃんの席」

「ええー、葉月、今日来るの？」

「さつき連絡が入って、もう駅についたって言ってたから、あと10分ぐらいでくると思うよ」

私は途端に面白くない顔になり、台所から出てきた母にその様子を見られてたしなめられる。

「律子、葉月ちゃんの前でそんな顔するんじゃないわよ。まったく、あんないい先生に面倒みてもらいながら、しょうがない子ねえ」

そうなのだ……実はこの香坂葉月（かざかはづき）という男は、この夏から私の家庭教師になつたばかりのT大に通う大学生である。

葉月は私より3つ上の、いわゆる『遠縁のお兄さん』である。

小さい頃数えるほどしか会った事のないが、その頃は一緒に仲良く遊んだものだ。細くって色白で、女の子みたいだった葉月……それが月日とはこうも残酷？に人を変えるものなのだろうか。

「あ、いらっしやーい」

インターフォンに応じる姉をチラリと見やり、私は黙って箸をテーブルに並べていた。

調味料を台所に取りに行つて、再びダイニングへ戻ると、そこに

は葉月がいて、母と姉と三人で何やら楽しそうに話していた。

「こんばんは、リツ」

「……いらっしやい」

葉月は極めて社交辞令並の笑みを口元に浮かべ、私に挨拶をする。だから私も、社交辞令並の笑みを顔に貼りつけて返答した。

「律子、今日葉月ちゃんゆっくりしていけるそうだから、一緒にお祭りへ連れて行ってあげなさいよ」

「ええ？ でも……加奈ちゃんたちと本屋で待ち合わせしているんだけど」

「どうせ皆、神社で会うんでしょ？ なら、いいじゃないの」

「お姉ちゃんが一緒に……」

「ああゴメンね、りっちゃん。私これから出かけなくちゃならないの」

姉が申し訳なさそうにちょっと笑って、軽く首をかしげてみせた。これを姉にやられると、大抵の人は『駄目』と言えないのだ……私は観念してしぶしぶ葉月と出かけることを承諾した。

「そうだ、せっかくだから葉月ちゃんに、お父さんが昔着ていた浴衣着てもらおうかしら。最近、若い人たちも浴衣着るのが流行っているそうじゃない」

「お母さん、何もそこまで張り切らなくても」

「いいじゃないの。どうせならアンタも浴衣着たら？」

「暑いから絶対ヤダ。それに私の浴衣はもう何年も前のだから、丈が足りなくて着れないよ」

私が断固拒否をすると、母はつまらなそうに口をとがらせる。『

夏休み中バイトもしないで暇だったんだから、浴衣ぐらい買っておけばよかったのに』と、母はブツブツ言いつつ、葉月のための浴衣を取りにリビングを出て行った。

暇で悪かったね……これでもカテキョのせいで勉強してたんですけどね？

私は麦茶を手にソファへ移動すると、どっかりと座って胡坐をかいた。

肩越しにテーブルを見やると、葉月が頬杖をついて私を見つめていた……銀縁の眼鏡の奥の、どこことなく冷めたような視線。

私は人の表情とか読み取るのがヘタだから、葉月が一体何を考えているのか皆目見当がつかない。とりあえず浴衣にはあまり興味なからう、というぐらいしか分からなかった。

うちの父の浴衣は洗めのグレーで、それを葉月が着ると銀縁眼鏡とあいまって、わりと風情のある感じになった。

「オトコマエだねえ、葉月ちゃん」

「なんか昔の書生さんって感じ。やっぱり日本男児は和服が似合うのね」

母と姉がよろこぶ傍で、葉月は困ったようすの微笑を浮かべてた。なんだ、普通に笑えるじゃん……と思ったのも束の間。

「リツ、もう行くか？」

そう言っただけ私に向き直った葉月の顔からは、すでに笑顔も消え失せていた。なんていうか……どう考えても私って、葉月に好かれてないよなあ。

だって葉月ちゃん、昔からりっちゃん一筋だし？

ありえない。

神社へ向かう途中だって特に話も弾まないし、私も口数が徐々に減っていった……いつも友達と一緒にいる時は、どちらかというとよくしゃべる方なんだけどもなあ。

もしかして葉月も、私とじゃなく別の友達と一緒にいる時はおしゃべりなのかもしれない。今こうして無口なのは、私と一緒にだからじゃないのかなあ。

そうだとしたら、こんな風と一緒に出かけるべきじゃないと思うのだけども。

「……リツ、どこか具合でも悪いのか？」

「え、何で？」

「いや……さつきから、あまり話さないから」

具合が悪いって？ 見当違いもいいところだ……。

私の口数が少ないのを『具合が悪い』と判断するあたり、向こうも私のこと何にも分かっているんだなあって思う。

私も葉月が何考えてるか、ちっとも分かんないな。

こんな状態で一緒に出かけて、楽しいのかな。やっぱりお姉ちゃんと一緒に出かけたほうがよかつたんじゃないの？

やがて神社が近づいてきて、祭まつり子の音色がはっきりと聞こえてきた。

「ノトかわいちゃったー、カキ氷食べよっかなっ！」

私はカラ元気にそう言うと、逃げ込むように神社の鳥居を小走りくで潜った。

02：話して欲しい 後編

「りっちゃん」

「加奈ちゃん、こっちこっち」

神社の鳥居をくぐり、石段を駆け上がった私は、すぐに加奈ちゃんたち一行を見つけた。

小走りになりながら足元からこみ上げてくるくすぐったいような興奮に、私は自然と声を立てて笑い出してしまう……加奈ちゃんたちと会うのはほぼ一年振りだ。

昔の同級生って不思議だ。

普段つき合いがあるわけじゃないのに、お祭りとかで久しぶりに顔を合わすと『特別』なんだって思う。そしていつでも思い出に還れるのだ。

「加奈ちゃん髪切った？ いいじゃん、似合うよ」

「りっちゃんは伸ばしているんだね。ちよつと女らしくなったかもよ」

「何それえ」

ひとしきり笑った私は、ふと葉月の存在を思い出す。

後ろを振り返ると、葉月は両方の袂たもとに手を入れて腕組みをし、少し離れた場所に立ったまま、見るともなしにこちらを見つめていた。

「ゴメン、ちよつと親戚の人と一緒になんだ。また後で会わない？」

「じゃあ神社の裏の河原で落ち合おうよ。どうせ菅原とか武田が花火いっぱい持ってきているはずだからさ」

「うん、じゃあ後でね！」

私は加奈ちゃんたちに手を振り、ふたたび小走りで葉月のもとへと戻った。

「ゴメン、友達がいたから」

「ああ、昔の同級生か？」

「うん、小学校の時の。ずっと会ってなくって、久しぶりだったの。でも全然変わってなくってね……」

私が興奮して話すのを、葉月は笑顔で相づちを打っている。

しかも葉月のその笑顔は、いつもの口元だけに浮かべるような取ってつけたようなものではなく、なんていうか珍しく自然な笑顔だった。

気がつくとは私は一人でしゃべり続けていて、ちょっとあわてて言葉切った。

「えっと、なんか食べようよ」

「カキ氷じゃなかったのか？ 向こうに店があったぞ」

「ホント？ 葉月さんも食べる？」

「ああ」

私は上機嫌のまま「やっぱイチゴかなあ」と言いながら歩き出すと、葉月が黙って少し後ろからついてくる。

足取りも軽く、時々すれ違っご近所さんや知り合いに挨拶をしながら、私は葉月がちゃんとしてきているのを確認していた。

葉月は相変わらずあまり話さないけれど、何だか機嫌の良さそうな、柔らかい微笑を浮かべている……こうしてみると、いつもの銀

縁眼鏡があまり冷たそうにも見え、ただ物静かで優しそうにすら見えてきた。

「なんかさ、今日の葉月さんは昔の人みたい」

「え、なんだそれ」

「浴衣来ているせいかなあ〜それからその眼鏡」

「眼鏡は関係ないだろ」

少し笑いながら前髪を手ぐしでかき上げた葉月の黒髪がなんだか色っぽい。

よく女子の浴衣姿を色っぽいとか言うけど、逆の場合もあるんだな。

まあ葉月の場合、男っぽい色気というか真面目っぽい色気というか……と、そこで『真面目っぽい色気って何だろう?』と自問自答して、かき氷のスプーンを手にしながら一人でウケてしまう。

「リッ、氷こぼれるよ」

「ぶっ……ゴメ、ティッシュある?」

「ほら、ちゃんと持ってるよ」

葉月はプラスチックのスプーンをかき氷に差しこむと、片方の手だけで器用にポケットティッシュからティッシュを取り出して私の腕にこぼれたイチゴ色の氷をふき取ってくれた。

「暑いから氷がすぐ溶けちゃうね。でもこんな時じゃないとカキ氷って食べないんだよなあ。葉月さんのメロン、美味しい?」

「まあね、どれもあんまり変わらない味だと思っけれど」

「うそだあ、イチゴとは全然違うはずだよ」

「どれ、ひとくち」

葉月はあつという間に、私が今まさに口に運ぼうとしていた氷の乗ったスプーンを私の手ごと捕らえると、自分の口へ誘導しパクリと食べた。

私は一瞬あつけに取られ、次にカーツと頬が熱くなるのを感じた……なんて恥ずかしい事をするんだ、コイツは！

「ちよつと、子供じゃあるまいし！ ちゃんと自分のスプーンで食べてよね!？」

「うーん、確かにちよつと違うかな……」

味わうように口を動かす葉月は、私の言葉などかまわずに、首を傾げてブツブツと独り言のようにつぶやく。

「じゃー、私はメロンもらっよ」

私は意識的に大きめの声で振り切るように、葉月の手にしたカキ氷のプラスチック容器に勢い良く自分のスプーンを突っ込んだ。

私と葉月はあちこちの出店をのぞきながら神社の端から端まで歩いたあと、裏の河原の近くまでやってきた。

神社の裏からは古い木造の橋が一本、浅瀬の川の向こう岸へ渡っていて、毎年夏祭りの夜はその橋の下で昔の同級生と花火をするのが習慣になっていた。

「加奈ちゃん」

川原は暗く、小さな花火の光と、その脇に設置された花火の火付け用口ウソク以外に灯りが無い。だから少し離れた橋の上から見下ろしたただけでは、誰が誰なのか判別できない。

私が加奈ちゃんの名前を橋の上から呼ぶと、小さな影が私に向かって大きく手を振った。

「行かないのか」

葉月は橋の手すりにもたれ、小さな川を見下ろしたままポツリとつぶやいた。

私は、なぜか少しだけ気が引けて、つい「行ってもいいの？」とそっと葉月にたずねてみる。そりゃ行っていいに決まっているはずだけど……でも、なんか……。

「じゃあちよつとだけ挨拶して、すぐに戻ってくるから待ってて」

「俺、先に帰るよ」

「え、ちよつと待って、2分、2分で戻ってくるから!」

「いいよ、気にしなくても。久し振りに会う友達なんだろう?」

なんでだか分からないけれど……ここに葉月を一人残して、友達の元へ行く気がしなくなってしまった。このまま、葉月と一緒に家へ帰りたくなってしまったのだ。

ずっと昔に、葉月とお祭りに行った事を思い出した。

そうだ。この神社の夏祭りに葉月と来たのは、今回が初めてじゃ

なかった。

二人で浴衣を着て、手をつないで神社の石段をかけ上がったのは……あれはたぶん、私が小学校の二年生か三年生だった。

やっぱりこの河原で同級生の友達が花火をやっている……私は葉月をほつたらかして、その友達のもとへ走っていつちやったんだ。

私はただ、友達と一緒に花火がしたくて……でも、すぐに葉月の事を思い出したから、振り返って橋の上を見たら……

「転ぶなよ」

後ろから追いかけてくる葉月の言葉に、私は急に現実を引き戻されるかのように我にかえり、それからツキン、と胸が痛むのを感じた。

葉月が橋の手すりから身を乗り出して、こちらを見ていた。

転ばないで、りっちゃん。

子供のころ、背中越しに聞いた声。

あの頃は振り返らずに走ったけれど、今は歩いている足を止めて後ろを振り返った。

一瞬、何か問いたげな表情を浮かべた葉月が、私と目線が合った事になぜか少しだけ驚いたような様子を見せる。

それから葉月は少し体を引くと、橋の上の月のように、淡く儂い^{はかな}笑みを浮かべた。

「りっちゃん、どうしたのー」

加奈ちゃんの声に、ふたたび我に帰る。

私は反射的に加奈ちゃんの姿を見やり、それからいそいで橋へ視線を走らせると……そこにいたはずの葉月の姿がなかった。

「りっちゃん、はやくー」

「ごめん加奈ちゃん！ 私もう帰らなくちゃ」

「え、なんでー」

すでに走り出した私の後ろを、今度は加奈ちゃんの声が追いかけてくる。

私は、ようやく橋の上に辿り着くと、手すりから身を乗り出して大声で加奈ちゃんに向かって叫ぶ。

「なんでもー！」

神社へ向かって走り、小さな林をすり抜けて境内の近くまで来ると、グレーの浴衣の後姿を見つけた。

「葉月！ バカ、どーして先に行っちゃうの！」

私は祭囃子まつりばやしに負けないよう、その後姿に向かって声を張り上げてやった。

視界がぶれるように、その後姿が震えて見えたと思ったら、葉月がゆっくと私に向き合うように振り返る。

提灯ちようちんから零れ落ちる橙色だいだいいろの淡い灯りを背に立つ葉月の表情は、影がかかってあまり良く見えない。

私は、無理矢理にも闇に目を慣れさせようと、目を瞬たはいた。

「リツ……」

私の耳に届いたかすかな声に、私は俄然がぜん勇気付けられる。

「バカ葉月、どうして先に行っちゃうのよ。待ってて、って言ったじゃない。すぐに戻ってくるって、言ったじゃない。どうして先に行っちゃうのよ」

「……友達が待っているんじゃないのか」

「バカ、だから言っているじゃない！ すぐに戻ってくるって……」
「ゴメン、りっちゃん」

葉月の思いがけない台詞に、私は言葉を切った。

私は呆ぼうけたように、手をだらりと両脇に落とし、ゆっくりと近づいてくる葉月をただ、黙って見つめていた。

近づくことに、葉月の表情が少しずつ輪郭りんかくを現し、やがて目の前に現れたのは……なんだか昔から見知ったような、少し弱々しい微笑を浮かべた葉月の顔だった。

私は、頬が緩んでくるのを感じた。

葉月は、逆に少し機嫌を損ねたようで。

「……お前、『葉月』って、呼び捨てにしたな」

「そっちこそ、私の事『りっちゃん』だって」

「うるさい、たまにはいいだろう？」

子供じみた会話が可笑しくて、つい堪えきれずに忍び笑いを漏らす。

こんなに暗いと、周りの物も自分たちも、なにかもよく見えなくって……まるで小さい子供にかえっちゃった錯覚を覚える。

私たちは自然に手と手を取って歩き出した。

「じゃ、お家へ帰ろっか」

「うん」

淡い光の洪水に包まれても、隣を歩く葉月の横顔は無邪気な笑顔のまま。

私たちは祭囃子に身を委ねながら、もう一度懐かしい神社の境内をゆっくりと歩いていったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1306u/>

教えてあげる

2011年6月29日17時36分発行